

ちいさな証

クリスチャンに出来ること

菊地祥彦

利府キリスト教会／オアシスライフ・ケアー



もうすぐ震災から3年が経ちます。これまでのみなさんのお祈りとご支援に心から感謝します。現在、被災地には震災直後に比べると見違えるような光景が広がっています。瓦礫は取りのけられ、瓦礫置き場に山のように積み上がっていた震災ごみも大分減りました。被災地を訪れる人からすれば、目前に空き地が広がる光景や、ぼつりぼつりと点在する新しい建物を見て、徐々に被災地も復興していると感じるでしょう。しかし、目に見える被災地は復興が進んでいるように思えても、目に見えない被災地の様々な部分には、まだまだ課題が山積んでいます。特に、人々の心には癒えていない傷、長期化する避難生活による疲れ、心の拠り所であったコミュニティを失った苦しみが残っています。

自分たちの住まいを失った方々の避難生活も3年が経ちます。応急的に”仮設”で作られた住宅の壁も薄く、面積も小さい住宅で暮らすことは日本人なら誰でもストレスが溜まるでしょう。震災によって心に重荷を抱えている人たちが住んでいるとしたら、それはどれほどのものなのでしょうか。しかも、資材の高騰や人手不足によって災害公営住宅の建築は大幅に遅れているため、避難生活をしている多くの人たちがまだまだ多くの日々を避難先で過ごすなければいけません。先日、僕は宮城県・東松島市にある仮設住宅を訪問しました。ある年配の男性とお話ししていた際、災害公営住宅についての話になりました。その方は「俺が生きてるうちには仮設から出られねえじゃないかなあ」と寂しそうに話していました。

避難生活での体調悪化や過労などで亡くなる「震災関連死」の死者数は長引く避難生活によって、岩手、宮城、福島など10都県で3,000人以上に上っています。建物の倒壊などを直接の原因とする「直接死」の死者数(約1,650人)を倍近く上回る数です。特に福島県では、現在も13万人以上が避難しており、震災関連死者数は、全体の半数以上を占めています。



私たちがこのような現状を聞く時、心を痛め、何か被災地のためにしたいと思うでしょう。クリスチャンである私たちは、痛みを抱える人たちに寄り添い慰めを与えてくださる神様に祈ることが出来ます。震災後、被災地には100万人以上のボランティアが訪れました。しかし、今ではめっきりその数が減ってしまいました。これまで被災家屋の瓦礫撤去や清

掃、側溝の泥だし、田畑や土手の瓦礫撤去、救援物資の仕分け作業、避難所の環境改善活動、写真整理、草刈りなどの力仕事を中心としたボランティア活動が実施されてきましたが、現在はそのようなボランティアニーズはほぼなくなっているからです。

しかし、祈りのニーズはいつまでもなくならないでしょう。被災地を助けるボランティアの数は激減し、被災地を助けようと思っても助けられない人が沢山いますが、私たちクリスチャンだけはその場において、祈りの支援を届けられます。震災関連死が増えてきていることからわかるとおり、被災した方々は心のニーズを抱えているでしょう。そのニーズを満たす最大の支援は、イエス・キリストの御名による祈りではないでしょうか。僕は教会が一つもなく、クリスチャンも一人もいない宮城県石巻市のある地域に関わっています。先日、その地域に支援に行った際「私たちのために祈ってください」と言われ驚きました。支援活動で訪問する度にお祈りさせてもらい、現地の方々はその度に「祈ってもらえると心に元気が与えられるんです。ありがとうございました。」と仰っていました。私たちだけでなく被災者の方々も薄々、祈りの力を感じているのだとわかり嬉しくなりました。



僕は、僕の教会で立ち上げた内職支援プロジェクトでつくったSHIZU革というキーホルダーを車の鍵に付けています。毎朝、鍵をもって家を出るとき、被災地を覚えて祈るように心掛けています。このSHIZU革のアイテムを、震災を風化させないため、また、クリスチャンの方々には

キーホルダーを持って祈ってもらうために販売しています。最近では、この働きに共鳴くださったアーティストの氷室京介さんの協力もあり、たくさんの方々にSHIZU革を手にとってもらうことができました。SHIZU革によって、被災地を覚える輪、被災地のために祈る祈りの輪を広げていきたいと願っています。



阪神淡路大震災も復興には10年かかったと言われていました。それ以上の規模の被害があった今回の震災ではどれほどの年月になるでしょうか。被災地のためにこれからも覚えてお祈りください。これ以上、震災関連死が増えるのを防ぎましょう。これ以上、福島原発事故が酷くならないように祈りましょう。今こそ、クリスチャンが支援するときです。